

「家族の命」を視点にして防災意識を高める小学校総合学習の実践開発

高 沢 秀 昭 (岡崎市立夏山小学校)
久 野 弘 幸 (愛知教育大学生生活科教育講座)

How to improve pupils' awareness for earthquake prevention through the Integrated Studies at elementary level?

Hideaki TAKAZAWA (Natsuyama Elementary School, Okazaki)
Hiroyuki KUNO (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

要約 防災意識を高める実践開発における最大の課題が持続的な意識形成である。本稿における中心的課題は、防災意識を「家族の命」という視点で形成することにある。平成16年と平成18年の二度の継続研究により、その視点の有効性を確認することができた。

Keywords : 防災教育, 問題解決, 総合的な学習の時間

はじめに

高沢は平成11年4月に夏山小学校に赴任し、平成20年度で9年目を迎える。赴任して5年間、夏山小学校における総合的な学習の時間である「はかせタイム」において夏山川をテーマに主に環境にかかわる学習活動に取り組んできた。この間、子どもたちは、学区を流れる夏山川の水質が悪化していたり川の水を育む山の手入れが十分に行われなかったために、山が荒れていたということが原因でそこにすむ「物言わぬ生き物」の命が失われていることを知り、「何とかしなくちゃ」という思いを強くもつようになった。そこで、その命を守るために自分に何ができるかを考え、活動に取り組んだ。子どもたちは自然を見つめる中で、自然を愛する気持ち(「自然愛」)を育み、自分の思いを実現することができた。

しかしその一方で、学校生活の中で子どもたちは兄弟姉妹に対して強く当たったり、その活躍や優しさを素直に認められなかったりするなど、自然を愛する気持ちと家族を思いやる気持ちとの間には、大きな開きがあることも感じている。家族に優しく接することができなければ、自然を含めて自己の周囲の人や物事を真に思いやること、互いの良さを認め合い支え合って生きていくこともできないであろう。だからこそ、自分の思いを実現していく過程で家族と向き合い、家族への見方や考え方を見直すきっかけとなる学習が必要であり、子どもたちはその学びの中で、互いを尊重し、支え合っていくこととする気持ち(「家族愛」)を育んでいく学習が必要であると考えた。

1. 平成16年度の実践(第6学年)

夏山小学校は愛知県教育委員会より「平成16年度親子で学ぶ地震防災教育」の委嘱を受けた。この行事と

はかせタイムとを有効関連させていけば、子どもたちは行事や学びで得た思いや願いを家族に伝えやすくなり、家族と向き合う場が数多く設定できるところに魅力を感じ、地震を教材化することにした。行事や学びの中で地震の怖さを実感した子どもたちは「家族を守りたい」という思いをふくらませ、そのためには何ができるかを真剣に考えようとするだろう。そして、家族に働きかけ一緒に歩みながら実現していく過程を通して、家族の結びつきが強くなり、家族愛が育つであろう。そして、家族に支えられて実現できたことが「やってよかった」「自分にもできるんだ」という自信となり、「家族のために次はこうしたい」と次の課題を見つけ、学び続けることができるであろうと考えた。そこで、研究主題を『自分の思いを実現できる子どもの育成』とし、実践を進めることにした。

(1) めざす子ども像

「自分の思いを実現できる子ども」

(2) 研究の仮説

徹底的に地震の怖さを実感させ、個の追究意欲を支える支援をすれば、自分や家族の命を守りたいという思いをふくらませ、自信をもって追究を進め、自分の思いを実現できる子どもが育つであろう。

(3) 手だての具体化

(手だて1) 地震の怖さを実感させる場の設定

身近には繰り返し関わったり自分の問題として真剣に考えたりできる地震に関する具体物はない。また、家族や地域の人々の中に過去の大きな地震を体験した人は少なく、地震の怖さを実感させる手段に乏しい。子どもたちは地震の怖さが実感できれば、「何とかしな

きゃ」という思いをもち、動き出そうとするだろうと考える。そこで、過去の地震に関する資料(新聞記事やビデオ教材)を取り上げる。まもなく中学生となる子どもたちの発達段階からすれば、自分のことに置き換えて地震に向き合う姿が想像できる。そして、地震で失われる命にふれる中で「自分は死にたくない」「家族の命も守りたい」という思いをふくらませ、その命を守るために自分にできることは何かを真剣に考えるだろう。

(手だて2) 個の追究意欲を支える支援

子どもたちの思いや願いを持続させ、実現させるには認め、支え、自信をつける支援が必要である。そこで、今回は朱書きや対話による教師支援に力を入れて行く。「どうしてこうしたいの?」とその思いが生まれてきた背景を問いただすことで、本当に自分がやりたいことは何かに気づき、課題が明確になるだろう。また、「ここまでできたんだから、次はこうしたら」と具体的な言葉がけをすることで、次の歩みへの見通しをもつことができるだろう。そして、思いを実現するために自ら歩み出していこうと考えた。

また、単なる追究の連続に終わらず、子どもたちの思いや願い、追究の進み具合などを交流し合う場を設定する。子どもたちは自分の思いや願いを認められる中で、自分の活動への意義を実感することができるであろう。また、自分の思いや学びを土台として友達の学びを受け入れる中で、自分の活動を見つめ直し、自分の思いを実現したいという気持ちをさらに高め、歩みを進めていくであろう。

(4) 抽出児

児童Iを抽出児とし、実践の成果を検証していく。

(5) 実践と考察

① 地震の怖さを実感し、「家族の命を守りたい」という思いをふくらませた児童I(手だて1の実践)

ア つっぱり棒やふんばる君(家具転倒防止器具)を設置したい

9月5日に和歌山沖で震度5弱の地震が起き、額田町でも子どもたちが体験したことがないほどの強く長い揺れが2度発生した。この地震をきっかけに地震への備えを進めていこうと考えている人が多いだろうと予想した。しかし、子どもたちの家庭の様子を見てみると、「揺れが長くて怖かった」「そろそろ大きい地震が来るかもしれない」と地震の怖さは感じているが、大地震への備えはあまり進んでいないようだった。何かをすればいいということは分かっているが、何をしたらいいのかわからないという気持ちもあるのだろう。そこで、できることから始めていくことが大切であると考え、それぞれの家庭での備えの現状を調べ、交流させることにした。

(児童Iの発表原稿(9/29)より)

私の家には家具が倒れてこないように、「つっぱり棒」や「ふんばる君」があります。でも、買っただけで準備していません。地震が来たら、まず何か家具が倒れると思います。私の部屋には長細いタンスがあります。それが倒れるととてもこわいです。これからは、ただ買っておいだつっぱり棒やふんばる君を設置していきたいです。そのために家族に呼びかけたいです。

児童Iは自分の家の備えの様子を調べる中で、つっぱり棒やふんばる君は購入してあるが、まだ準備していないこと、自分の部屋に倒れると怖いタンスがあることに気づいた。そして、買ってあるだけでは意味がないので、早く設置したいという気持ちをもった。私が注目したのは「そのために家族に呼びかけたい」という言葉である。つっぱり棒やふんばる君を設置するのは大人の仕事であるが、呼びかけることは子どもでもできる。児童Iは地震への備えの中で自分にできることに気づいた。そして、この言葉の意味を児童Iに伝えたく、発表原稿に「これが自分にできることだね」と朱書きを入れた。

イ 地震に関心をもってもらえるようにしたい

10月13日に「親子で学ぶ地震防災講座」が開かれ、起震車体験と地区別情報交換を行った。「地震は怖い」と言っても実際の大地震を体験していない者にとっては、本当の怖さはなかなか分からない。だからこそ、今回の起震車体験で地震の怖さを実感させたいと考えた。しかし、体験が始まるとすぐに笑い声や「楽しかった」という声が聞こえ、揺れることを楽しんでいる雰囲気を感じた。表情からは真剣さや怖さは伝わってこなかった。

(児童Iのはかせタイムノート(10/13)より)

起震車に乗る前は、立ってられないほどの揺れなんだなあと思っていたけど、やってみると平気だった。それはみんなが見ているし、いつ揺れるかが分かるからだと思う。その場では私も笑っていたけど、もし一人の時に突然地震が来たら、絶対に笑ってられないと思った。

児童Iの感想を読み、「みんなが見ていて、いつ揺れるか分かる」ために起震車では揺れの怖さを実感できないことが分かり、別な方法で再度子どもたちに実感させたいと思った。しかし、「一人の時に突然地震が来たら、絶対に笑ってられない」という言葉から、一人の時に地震が起きたらどうしたらいいのかを不安に感じていることが伝わってきた。

起震車体験の後、各地区ごとに分かれて情報交換会を開き、地震への思いや備えの現状を交流した。非常持ち出し袋やキャンプ用品を準備している家庭もあれば、「怖い」「準備をしなくては」と思いながらも思うように備えが進んでいない家庭もあることが分かった。

た。しかし、どの家庭もやっておきたいことが明確になっており、家の人の防災への意識が少しずつ高まっていると感じ、子どもたちが真剣に働きかけていけば、多くのことが実現できると思った。そこで、今回の防災講座を通して学んだこと、感じたことを家の人に伝えさせ、その反応を確かめさせた。児童Ⅰは「起震車体験から感じた地震のおそろしさ」「防災グッズの設置」「非常持ち出し袋」の3点を伝えた。下はその時の感想である。

〈児童Ⅰの日記(10/13)より〉

やはり予想していたように、あまり関心がなかった。親にたよらずに自分で計画を立てて、親に意見をぶつけて地震について関心をもってもらえるようにしたい！

児童Ⅰは「地震は怖い」と言いながらも防災グッズが買ったままで設置していないことから、家の人は「あまり関心がない」と予想していた。もしかしたら、意識を変えてもらえるかと期待はしていたが、予想通りの結果に、人をあてにしているのはいつ備えができるか分からないという気持ちをもった。そして、自分が中心となって家の人に働きかけ、地震に関心をもってもらえるようにしたいという思いをふくらませた。児童Ⅰの中に家族のためにも今できることをやっておきたいという気持ちが芽生え始めているのを感じた。

ウ 地震の本当のおそろしさを教えたい

本単元を進めて1ヶ月半になった。家庭での備えの交流、起震車体験、地区別情報交換など様々な取り組みをしてきたが、子どもたちとの対話からはまだ具体的な動きが見られないことが分かった。子どもたちに備えが進んでいない理由を聞いてみると、「親が関心がないから。家の人が出来ないから」と答え、人をあてにしすぎている雰囲気を感じた。この人任せの意識を何とか打破しなければ、自分の思いや願いを自分からの働きかけによって実現する力は育たないと考えた。そして、そのためには子どもたちが地震により真剣に向き合う場が必要であると考えた。

そんな時、新潟県中越地震(10月23日)が発生した。死者は阪神・淡路大震災(平成7年)に比べてかなり少なかったが、新幹線の脱線や家屋の倒壊、道路の破損状態から、その地震の大きさや怖さを痛感した。単元展開の最中に起きたこの地震を取り上げ、関心をもたせることで、防災についてより真剣に考えていこうと思った。そこで、入浴中に家屋の下敷きになり亡くなった6年生の女の子の新聞記事を授業で取り上げた。この記事を取り上げたのは、亡くなったのが同学年の子どもでもあるから、「自分だったらどうしよう」というように自分に置き換えて考えようとするだろうと考えたからである。

〈児童Ⅰのはかせノート(10/26)より〉

この地震でお風呂に入っているときに家の下じきになり、私と同じ6年生の女の子が死んでしまいました。だから、お風呂に入っている時に地震が起きたらどうしたらいいの心配になりました。また、予知できる地震ならいいけど、何も知らずにいきなり大きな地震が何回も起こったら逃げるひまがないなあと思います。そして、自分はもちろん生き残りたいけど、家族の誰かが死んでしまったらと考えると、とてもこわいです。そこで、家族にこの地震についての感想を聞いてみました。お母さんは「被害は少ないけど、神戸の地震よりも大きい」、おばあちゃんは「気の毒だなあ。夕方になったら寒いから、着る物があるのかなあ。」などと言っていました。でも、まだ地震の本当のおそろしさを家族みんなは知りません。計画を立てて地震について家族で真剣に考えていきたいです。

児童Ⅰは家にいるときに地震が起きても家族がいたため、自分が一人になった時に地震が起きたらどうしようということを今まで考えたことがなかった。しかし、入浴中に命を失ったケースにふれることで地震はいつ起きるか分からないということに改めて気づくと共に、一人だったら何もできない、死んでしまうかもしれないと地震の怖さを感じる事ができた。そして、「自分はもちろん生き残りたいけど、家族の誰かが死んでしまったらと考えると」という言葉から、家族の命も心配になってきたことが分かった。児童Ⅰは家族がこの地震から何を感じたのかを確かめたいと思い、感想を聞いた。家族は「地震は怖い」と言っているが、備えの様子からはまだまだ関心が薄いと感じている。そして、このままの状態では大きな地震が起きたら家族が死んでしまうことが心配になり、今のうちに「地震の本当のおそろしさを教えたい」と考えるようになった。それは、児童Ⅰ自身が「地震は命を奪う怖い物」であると実感したからである。そして、「家族のためにも今自分ができることをやっていきたい」と児童Ⅰの課題が明確になってきたのを感じた。そこで、この思いが実現できるように児童Ⅰの学びを具体的に支援していくことにした。

② 家族会議を開き、備えを進め、自分の思いを実現できた児童Ⅰ(手だて2の実践)

ア 家族会議を開こう

児童Ⅰは、「計画を立てて地震について家族で真剣に考えていきたい」という思いをもっているが、すぐに動き出せないのは、何のための計画を立てていいのか、また計画とはどうやって立てたらいいのか分からないからではないかと考え、対話してみた。計画を立てた理由を聞くと、「家の備えが進まないのはいつやるかを決めていないからで、この日にやると決めておけば、きっと協力してやってくれると思う」と答えた。そして、相談してやっておきたいこと6点を考えていた(①地震について家族で話し合う(家族会

議), ②非常持ち出し袋の用意, ③家具の固定 (ふんばる君・つっぱり棒), ④それぞれの部屋からの逃げ方, ⑤懐中電灯の準備, ⑥まくら元にスリッパを置く)。課題を明確にしたことが児童 I のやる気を引き出したと感じた。

家族会議を開きたい理由を聞くと「自分たちだけでよしじゃなく ておじいちゃん, おばあちゃん たちも一緒に家具の固定をすれば, 家族みんなで逃げられるし, 家具の下じきになって死んでしまったりけがをしたりしなくて すむ。家族みんなで話し合えば, 地震についてもっと分かってもらえると思うから」と答えた。同じ家に住む家族全員のことを真剣に考え, 歩み出そうとしていると感じた。そこで, まずは家族会議が開けるように, 計画表を作り, 家族全員が都合のつく日を選ぶといいこと, そして, 会議では何を相談したいのかを決めておくこととスムーズに進むことを助言した。翌日, 「先生, 11月10日に会議を開くことになりました」と嬉しそうに報告してくれた。また, 会議では「どの家具を何で固定するのか」「非常持ち出し袋の中身はどうしていくのか」を自分の案をもとに相談すると決めていた。

イ 家族会議を開いてよかった

10日に児童 I が司会となり家族会議が行われた。相談する内容は事前に児童 I が考えていたが, 父, 母から新しいアイデアをもらうことができ, 家族も真剣に考えていたことに児童 I は気づいた。

〈児童 I のはかせノート (11/10) より〉

非常持ち出し袋について話し合いました。ラジオはあった方がいいと お母さん が言っていました。もしテレビが見れなくなったら何の情報も入ってこないから, 私が必要だと思いました。 お父さん が係決めもしました。私が思っていたよりも家族 (一部を除く) が真剣に考えてくれたのが会議で分かりました。 会議を開いてよかった です。

そして, 会議を開きたいという思いが実現できた喜びが「開いてよかった」という言葉に表れている。しかし, まだ 家族の一部 が真剣に考えてくれないと感じている。次は何らかの方法でアプローチしていくことが期待できる。

ウ 「ありがとう」と言ってもらえた

10日の家族会議で固定する家具とその方法, そして固定する日が14日に決まった。

遅い時間ではあったが最後までやり遂げたとともに, 何とかこの日に作業を終えたいという決意を感じた。また, 父親にすべてを任すのではなく, 自分でできることは自分でやった。だからこそ, 祖母から「ありがとう」と言ってもらえたときには「やってよかった」という満足感を得ることができたと思う。

〈児童 I のはかせノート (11/14) より〉

9時という遅い時間だったから私とお父さんだけでやりました。ふんばる君が奥に入りすぎて大変でした。お父さんがタンスを持ち上げてくれたけど, タンスが急に落ちて手はさまるんじゃないかとこわかったです。

おばあちゃんは「ありがとう。これで安心して逃げれる」と言っていました。だから, つっぱり棒などをつけてよかったです。

エ 私のやったことには意味があった

子どもたちは自分の家の現状を調べる中で, 今必要な備えは何かを考え, 「非常持ち出し袋を用意したい」「家具の固定をしたい」などの思いをもった。しかし, 家の人をあてにしすぎたり, 協力が思うように得られなかったりするために, 行動に移せずにいた。そこで, 家族と一緒に歩みながら思いを実現していった児童 I の学びにふれさせることで, 子どもたちは家族への働きかけのヒントを得ることができる, そして, 児童 I は自分の歩みが認められることで, 自分がやってきたことには意味があることを実感し, 次の活動へさらに意欲的に取り組んでいけるようになることを考え, 児童 I にここまでの歩みを紹介させる場を設定した。

児童 I は家族会議を開こうとした理由, その内容, 会議や家具固定の様子などを自分の気持ちを交えて発表した。発表の言葉一つ一つから自分がやったんだという自信を感じた。また, 聞き手の子どもたちは家族で協力することの意義を感じると共に「会議を開きたい」「家具を固定したい」と思っただけを伝えるのではなく, その思いが生まれてきた背景を伝えることが大切であることを学んだ。そして, 突然家の人に言うのではなく, 計画を立てていくことが実現への近道であることに気づいた。

〈授業記録「地震の備えを行動に移そう」(11/17)〉

児童 I : (発表が終わり) 質問や意見はありませんか?

児童 J : すばらしい。みんなが協力してくれるなんて。

児童 C : 会議だけでなく, つっぱり棒を固定できたなんて すごい。

児童 H : 家の人 が 真剣で すごい。係が決めてあれば, 早く行動できる。

児童 G : 家族が すごい と思う。ちゃんと集まって真剣に考えたことが すごい。

児童 D : 会議を実際にやったのが すごい。

〈児童 I の日記はかせノート (11/17) より〉

みんなから「すごい」と言ってもらえてうれしかった。改めてこの活動には意味があったと思った。これからもこの活動を続けていきたい。

家族と一緒に会議を開き, 家具を固定できた時点で児童 I は「やってよかった」という手応えは感じていた。そして, 今回の発表の場を通して, たくさんの友達から「すばらしい」「すごい」と褒められ認められたことで, 「改めてこの活動には意味があった」と活

動の意味を実感することができた。それが、「これからも続けていきたい」という思いにつながっている。

(6) 研究の成果と課題

① 成果

手だて①により新潟県中越地震で失われた小6児童の命を取り上げたことで、児童Iは地震の怖さを実感し、自分のことだけではなく、自分の家族の命にも目を向けていくようになった。それが、「家族の命も守りたい」「計画を立てて真剣に家族と地震について考えたい」という思いに広がった。そして、児童Iの家族を思う気持ちが家族を動かし、会議を開くことができ、家具も固定できた。

手だて②により児童Iは友達の意見や活動に流されることなく自分の活動が続けることができ、さらに発表の場で自分がやってきたことを褒められ認められることで、自分の活動の意味を感じ、「やってよかった」という満足感や成就感を得ることができた。それが次の活動を進めていく意欲や自信につながった。

② 課題

児童Iの学びの姿を核として、自分の思いを実現できる子どもに育成をめざして実践を進めてきた。しかし、家族への働きかけ方が分からず、足踏みをしている子どもたちがいる。今回の学びを児童Iだけの宝物にしておくだけでなく、家族に自分から働きかけた児童Iの学びの良さを広め、共有することで、他の子どもたちも自信をもって歩み出し、人とかかわり働きかけながら自分の思いを実現していくであろう。

2. 平成18年度の実践（第6学年）

平成16年度に県教委から地震防災教育の委嘱を受け、親子で起震車に乗ったり、地区別に情報交換をしたり、私が担任した6年生が防災について学習したことを発信したりするなどの活動に取り組み、一時的であったが防災への関心が高まった。しかし、その後は近辺で大きな地震が起きていないこともあり、子どもたちの様子を見るとこれといった備えは進んでいないようである。幸いにも2年前防災の学習をした子どもの弟や妹が6年生に半数おり、上の子から防災の知識を得ていたり、家の人が学習の様子を知っていたりという土台がある。この子どもたちの学びを核として位置づけ、学習を展開していくことで2年前の学習の成果を検証することができる考えた。

地震の怖さを実感した子どもたちは家族の命を守るためには何ができるかを真剣に考えようとするだろう。そして、「我が家の地震対策について考えよう」と家族に働きかけ一緒に歩みながら実現していく過程を通して、防災についてはそれほど意識がないと思っていた家族が、実は「自分の命を守ることを考えてい

る」ことに気づき、家族を見る目や家族を思う心が育まれるであろう。そして、「家族の命をもっと守ってあげたい」と次の活動への思いをふくらませ、学び続けることができるであろう。そこで、研究主題を『人とかかわり働きかけながら、自分の思いを実現できる子どもの育成』とし、実践を進めることにした。

(1) めざす子ども像

「人とかかわり働きかけながら、自分の思いを実現できる子ども」

(2) 研究の仮説

地震の怖さを実感させ、家族に聞き取りをしたり防災について話し合ったりする場を設定することで、子どもたちは自分や家族の命を守りたいという思いをふくらませ、自信をもって追究を進め、自分の思いを実現できる子どもに育つであろう。

(3) 手だての具体化

(手だて1) 地震の怖さを実感させる場の設定
※平成16年度実践に同じ

(手だて2) 家族に聞き取りをしたり防災について話し合ったりする場の設定

地震の仕組みや過去の地震（兵庫県南部地震や新潟中越地震等）の被害の様子を学ぶ中で、子どもたちは地震の怖さを感じ、それぞれの家での備えの現状について目を向けていこうとするであろう。そして、備えの様子を調べてみると、家具転倒防止器具が設置していなかったり防災グッズが何も購入していなかったりすることから、「家の人は防災に関心がない」と考えたり「家の人がやってくれないから対策が進まない」と家の人をあてにしてしまったりということが予想される。しかし、一見関心のないように見える家族も子どもたちの知らないところで防災の準備を進めていたり子どもたちの命を守るために親なりに考えていたりすることがある。そこで、家族に聞き取りをしたり防災について話し合ったりする場を設定する。子どもたちは学習の中で得た思いや願いを家族に伝えやすくなり、また子どもたちは今まで知らなかった家族の思いにふれることができる。家族一丸となって備えを進めることができるだけでなく、自分が家族の一員であるという自分の存在感を強く意識できると共に家族を思いやり尊重する気持ち（家族愛）が育まれるであろうと考える。

(4) 抽出児

児童Bを抽出児とし、実践の成果を検証していく。

(5) 実践と考察

① 地震の怖さを実感した児童B（手だて1の実践）

A 自分の命を犠牲にしても子どもを守るという思いがすごいな

6年生の子どもたちは平成6年・7年に生まれた。

そして、生まれて1年も経たない頃に兵庫県南部地震が起き、6400人もの尊い命が失われた。もちろん、子どもたちにはその地震の記憶はなく、また知識も乏しい。そこで、まだ赤ちゃんであったことから成長と合わせてその時のことを家族も覚えているかもしれないと考え、家族に聞き取らせることにした。下は個々の聞き取りを交流させた時の授業記録である。

〈授業記録(9/20)より〉

T : 家の人から兵庫県南部地震が起きた時の様子を聞き取ったことを教えてください。

児童F : 私は生まれて間もなかったので、お母さんの実家にいました。

児童H : はくは生まれて2日目で、新生児室にいました。お母さんも入院していました。

T : お父さんはどうしていたの？

児童H : お父さんは家において、地震が起きた時に2つ上の姉を抱きかかえて身を伏せたと書いていました。

児童G : 私も似ていて、お母さんが私と1つ上の姉をとっさに抱きかかえてくれたそうです。

児童C : お母さんは朝6時のミルクの準備をしていました。

児童A : 私も同じで、お母さんは3時間おきで起きていたと言っていました。

児童E : はくはお母さんの実家の東浦にいたけど、額田よりひどく揺れたそうです。

聞き取りを交流することで、子どもたちは自分には赤ちゃんの時期があったことを感じる事ができた。児童Bは幼い自分たちの命を家の人が必要になって守ってくれていたことを知り、その日はかせノートに「自分の命をぎせいにしても、子どもを守るといふ思いがすごい」と書いた。とっさに子どもの身を守る家族の姿にふれる中で、自分たちが家族から大切に守られていることに気づく事ができた。また、兵庫県南部地震と東海地震の想定されている被害の大きさを比較し、「東海地震ではもっと大きいから死んだらどうしよう」といふように、少しずつ地震の怖さを感じ始めていることが伝わってきた。

イ 寝る部屋の家具を安全な所に移動させた方がいい

本単元を進めて1ヶ月になった。これまで地震についての一人調べ、避難訓練、兵庫県南部地震についての聞き取りなど様々な取り組みをしてきた。子どもたちは死者数や倒壊した家屋の被害などの数字からその地震の怖さを感じ取っていたが、人ごとのように捉えているように感じた。被災者の悲痛な悲しみにふれさせることによって、子どもたちは地震の怖さを実感し、自分の問題として考え、動き出すことができるであろうと考えた。

そこで、兵庫県南部地震の被災者の手記『語り継ぎたい。命の尊さ』の中に収録されている「助かった命失われた命」を授業で取り上げた。この記事を取り

上げたのは、就寝中に隣の蔵や風呂屋の煙突が倒れてきて亡くなった方の事例にふれることで、「自分だったらどうしよう」といふように自分に置き換えて考えようとするだろうと思ったからである。

授業後に児童Bは「それが自分で、顔に落ちてきたらと考えると、こわいなと思いました」と感想を書いた。就寝中に地震が起き、何が倒れてきたら同じように死んでしまうかもしれないと自分の立場で地震の怖さを感じていることが分かった。そして、兵庫県南部地震の被害の様子や被災者の手記にふれる中で、地震で最も怖いのは家具の転倒で命を失うことであることを知り、「ねる部屋の家具を安全な所に移動させた方がいい」といふように自分の家の家具の配置にまで目を向けるようになった。児童Bの課題が明確になってきたことを感じ、この思いが実現できるようにそれぞれの家庭での地震の備えを調べさせることにした。

ウ 家族が集まる時間があったらやってみたい

それぞれの家庭の地震の備えを調べるのにあたり、備えの現状や今後の対策の仕方などが視覚的に捉えられるように写真に撮っておくように指示をした。すると、翌日「先生、写真を撮ってきました。」と児童Bはデジカメに記録された写真を見せてくれた。すぐに行動に移す姿から学習への関心の高さ、「備えをよりよいものにしたい」といふ思いの強さを感じた。

次に児童Bは写真をプリントアウトし、色画用紙の台紙に貼った。その時、驚いたのは児童Bが2色の台紙を使っていたことである。「どうして2色使ったの？」と聞くと、「黄色は今できている備えで、オレンジは今心配していることがみんなに分かるように色分けをしました。」と答えた。児童Bの活動意欲の高まりを感じ、この思いを満たすためにも、今できている備えを交流したり心配に感じていることについて自分の問題として互いにアドバイスし合ったりする場を設定したいと考えた。そして、児童Bを第一発表者として話し合いを行った。

この日の話し合いの中で、子どもたちがこれからやっていきたい地震対策が多く出てきた。しかし、自分だけの思いだけで進むのではなく、家族みんなの意識を高め、協力を得ていくことで実現が可能となる。そして、「誰かにやってもらおう」といふように誰かをあてにしがちな子どもたちには、家族と一緒に防災対策に取り組む大切さに気づいてほしいと願った。

そこで、2年前に姉(平成16年度の実践の抽出児である児童I)が先頭に立って家族会議を開き、防災への意識を高め、家具転倒防止器具を設置した児童Hの事例を紹介させた。(授業記録参照)

児童Hは2年前の家族での話し合いについては「起きるわけない」といふ思いから、たるいとさえ感じていた。しかし、実際に家族が相談をし、対策を進めた

〈授業記録(9/26後半)より〉

- T : H君に2年前のことを紹介してもらいます。
- 児童H : ぼくの家は姉が6年生の時に役割分担を決めました。父は力仕事、母と祖母は火の始末、姉は持ち出し袋、ぼくと弟と祖父はじゃまをしないように避難する係です。おばあちゃんの家に住んでいた時、姉がつっぱり棒をつけようと言って、父と姉と祖父が食器棚につけました。
- T : 最初はどうかだった？
- 児童H : たるい。起きるわけがないと思った。でも、家族全員で仲良く力を合わせてやっていくといいと思ったので、みなさんやってみましょう。
- T : やってみたいと言われて、みんなはどうですか？
- 児童H : 新しい家はつっぱり棒とかの話は出てこないで、また家族で話し合いたい。
- 児童B : 家族で集まれる時間があったらやってみたい。
- 児童H : 家族みんなが忙しいけど、土日にやりたい。
- 児童G : 父の時間があったら、やってみたい。

ことが喜びとなり、「家族全員で仲良く力を合わせてやっていくといいと思ったので、みなさんやってみましょう」と呼びかけている。また、対策を進めた後に新居を建て、祖父母とは別棟での生活を始めたこともあり、「また家族で話し合いたい」というように、過去の学びをふり返る中で、これからの課題を児童H自身が見つけることができた。さらに、それに続いて児童B、児童Gからも「やってみたい」と発言した。子どもたちは授業で学習したことを家庭でも話題にし、気軽に親子で話し合える雰囲気にある。そして、機会を意図的に設定すれば、児童Hの事例のように家族で防災について話し合うことができるのではないかと考えた。そこで、6年生のどの家庭でも防災についての家族会議を開いてもらうことにした。

② 家族会議を開き、家族の思いに気づくことができた児童B（手だて2の実践）

ア 家族会議を開こう

9月26日の話し合いをきっかけに、子どもたちは「家族会議を開いて地震について家族で真剣に考えていきたい」という思いをもった。しかし、すぐに動き出せないのは、何を話したらいいのかわからないことと日程の調節がなかなかつかないという2つの問題があることが子どもたちとの対話で分かった。そこで、改めて児童Hが家族と話し合ったことを紹介させ、それを参考に話し合いたいことを決めた。児童Bが家族と話し合いたいことは、次の7点であった。(①地震への思い(児童Bが話す)、②家族の地震への思い、③家具の固定について、④持ち出し袋の中身について、⑤係を決める、⑥集合場所、⑦感想)

また、日程については、「家族に会議を開く予告をして、都合がつく日を決めていくといいよ」と全員にアドバイスをした。数日後、児童Bは「先生、10月21

日に会議を開くことになりました。」と嬉しそうに報告してくれた。そして、家族会議を開いてみんなで防災について考えていくんだという意識を高め、また日程を決めやすくするために教室に掲示してあるカレンダーに開催日を記録した。

イ ママは家族のことを考えているんだ

21日に児童Bが司会者となり家族会議が行われた。相談したい事柄を忘れないために記録用紙にメモをしながら話し合いを進めた。

児童Bは家族と係決めについて話し合う中で、母親がほとんどの仕事を分担することから、「一人でそんなにやるのは、だいじょうぶ」と母親のことを心配している。そして、「困っていたら手伝いたい」というように、これまでは母親に頼りがちであった児童Bが家族会議の中で、自分ができるとは自分でやっていると考えていることが分かった。また、「しっかりとつくえの下にもぐってひなんしてほしい」と、弟を思いやる気持ちが伝わってきた。

さらに、食器棚に家具転倒防止器具が設置してあることは前々から知っていたが、家具の固定について話し合った時に飛散防止フィルムが貼ってあることに気づいた。以前、児童Bが水槽の置き場所のことを相談した時に、その対応から母親は命が大切だと思っていないのかなと思っていた。しかし、知らないうちに備えが進んでいることを知り、「ママはちゃんと家族のことを考えているんだ」と自分たちのことを大切に考えてくれる喜びを感じることができた。

ウ 今度家族と話し合いたい

8家族全ての家族会議が終わったところで、家族と話し合うことの良さを味わいながら、次の活動へ意図的に取り組んでいけるようにと願い、会議の様子を紹介する場を設定した。

児童Bは知らないうちに備えを進めていてくれる母親の姿を自分の気持ちを交えて発表した。また、児童Gの家は停電になってもバッテリーの電気を活用できること、児童Hは家具転倒防止器具を設置しなくても安全な家の作りになっていることなどを発表した。子どもたちは家族が自分たちの命を守るために様々な工夫をしてくれていることに気づき、自分たちが大切な存在であることを感じると共に家族の命を守るためにできることをやっていきたいという気持ちを高めた。

〈児童Bのはかせノート(10/30)より〉

「夏山小学校の体育館に行く時に橋がこわれたらどうするんですか」と質問された時、そんなことまで考えていなくて答えられなかったから、今度家族で話し合いたいなと思いました。

児童Bは発表の中で避難場所が夏山小学校であることを伝えた。すると、橋が壊れた時の避難の仕方を質問され、家族ではそこまで話し合っていないことから、「今度家族で話し合いたい」と考えている。そして、もう一度家族に働きかけながら家族会議を計画し、司会者として家族の意見をまとめる児童Bの姿が目に見えられた。

(6) 研究の成果と課題

① 成果

手だて①により兵庫県南部地震で就寝中に倒れてきた蔵や風呂屋の煙突の下敷きになって失われた命を取り上げたことで、児童Bは地震の怖さを実感し、自分のことだけではなく、家族の命にも目を向けていくようになった。そして、自分の家の地震の備えを意欲的に調べ、「寝る部屋の家具を安全な所に移動させた方がいい」というように避難のことを考えて家具の配置をしていきたいという思いをふくらませた。

手だて②により児童Bは母親は地震にあまり関心がないと思っていたが、家族会議を開くことで母親が家族のことを考えてくれていたことを知り、母親への見方が変わると共に家族の命も守ってきたいという気持ちもふくらませた。そして、これまでは母親に頼りがちであったが、自分にできることは自分でやろうと考えるところに成長を感じた。

② 課題

本単元は家族を中心として人とのかかわり合う場を設定してきた。しかし、家族で話し合っただけで固定する家具は決まっても、どの方法で固定したらより安全かということからは分からないものである。防災の専門家に話を聞く場も今後必要となるであろう。

おわりに

平成19年度の2学期に3度の目の防災学習に取り組んだ。今回は9月1日に岡崎市防災訓練に参加したことをきっかけに学習をスタートさせた。消防隊の防災訓練を目の当たりにすることから、「もし家がほうかひいたり人が下敷きになったりして死ぬこともあって、怖いなあ」と、その怖さを実感することができた。また、起震車体験では震度4と5弱の揺れを体感することで、「急に地震が起きたらパニックになりそうだな」と感じていた。さらに、消火器訓練ではなかなか的に当たらないことから、「火事の際は怖くて一歩も動けなくなり、消すことはできないような気がしました。」と火災の怖さを感じるすることができた。子どもたちは地震といえば揺れや家屋の倒壊などの被害を怖く感じていたが、訓練に参加することで火災への備えも必要であることに気づくことができ、防災を考える視野が広がった。

その後、理科の『土地のつくり』の学習では2005年から2007年の2年間の間に世界でたくさんの大きな地震が起きていること、日本の近くには4つのプレートがあるので地震が多いことなどが分かった。また、我が家の備えを調べてみると、ここ数年のうちに家具転倒防止器具が設置されたり非常食が購入されたり、少しずつ備えが進んでいることに気づき、安心して過ごせるようにもっと備えを進めていきたいという思いをもった。

そして、朗読ボランティア「かじか会」の方が読み聞かせの際に、『山古志村のマリと三匹の子犬』を読んでもらった。犬や猫などのペットを大切に飼っている子どもが多いこともあり、子どもたちはこの話に深い感銘を受けた。そこで、このお話をもとに台詞や動作を考え、夏山小学校6年生版の『山古志村のマリと三匹の子犬』の台本を創り、学芸会で上演した。家族同様の大切なペットでも避難所に連れて行くことができない。いざという時にペットをどうするのかを考えなければいけないことを劇を通して伝えることができた。

これまで3回地震への備えを中心とした防災学習に取り組んできたが、夏山地区は岩盤が丈夫なことや大きな揺れがほとんど起きないことから、備えを早急に進めていこうとする雰囲気は感じられない。しかし、夏山地区は夏山川沿いに家屋が連なり、その裏には山があることから、地震の揺れ以上に大雨による洪水や土砂崩れが心配な地区である。地震に限らず、その他の災害も念頭に置いた防災学習を進めていく必要があると感じる。また、近年、登下校中に不審者に遭遇したり被害を受たりする事件が日本各地で頻繁に起こり、夏山学区でも「守り隊」が発足し、子どもたちが安全に登下校できるように一緒に歩いていただけるようになった。自分の命は自分で守らなければいけないという意識は子どもたちの中に少しずつ高まっている。だからこそ、本校の実態に合わせた防災や安全に関する学習のカリキュラムを作り、実践することを通して、子どもたちと共に自分の命は自分で守るために何ができるかを一緒に考えていきたいと思う。